

人類上顎第二大臼齒の咬合面に出現する 異常結節に就て

穂坂 恒夫 三嶋 昌平

(滿洲醫科大學齒科學教室 佐山教授)

人類齒牙過剩結節，殊に大白齒の過剩結節に就て，余等の一人穂坂は曩に滿洲醫學雜誌（第22卷，第4號，昭和11年）に報告したが，其の際第二大臼齒の咬合面近心頰側咬頭と近心口蓋側咬頭の中間に明瞭に獨立した過剩結節の數例を併せ報告した。其後本結節に就て關心を持つて文献，症例等に注意し居た處，偶と顯著なる本過剩結節を有する患者に遭遇したので，茲に本過剩結節に就て報告する。

日本人男子，15歳の中學生にして，上顎左側第二大臼齒の咬合面，即ち近心頰側咬頭と近心口蓋側咬頭との中間に出現したもので，形態は米粒狀を呈し，大きさ（計測値）は，長さ（高さ）4 mm，基底部の頰舌徑3.5 mm，近遠徑3.8 mm，其の尖端は僅かに磨耗してゐる（圖1）。

本過剩結節の現出した上顎左側第二大臼齒の形態は普通同名齒の形態と異ならず，大きさは近遠徑9.7 mm 頰舌徑11 mm，高さ5.5 mm で木だ咬合線に到達してゐない（圖2）。

レントゲン寫眞では該結節は一つの咬頭であり，齒髓腔が其の内に向ひ進入してゐる。齒根は尋常である。

近接齒牙，上顎左側第一大臼齒にはカラベリー氏結節を認めるだけで異常はない。其他には上顎正中離開及び中，側切齒間離開が見られるだけである。

曩に穂坂が報告した4例を簡単に抄記すると。

第1例。女 28歳。[?]（穂坂論文附圖第13圖）。上顎左側第二大臼齒。近心頰側咬頭の三角隆線上に米粒狀を呈する。高さ3 mm，近遠心徑3.2 mmの過剩結節にして其の頰側基部は三角隆線に融着せるも該結節の上部は隆線と明かに分離して居る。近心邊緣隆線及び舌側近心咬頭及び遠心頰側咬頭とは明瞭なる溝によつて築してゐる。

第2例。日本人男，24歳。[?]（穂坂論文附圖第19圖）。上顎右側第二大臼齒。近

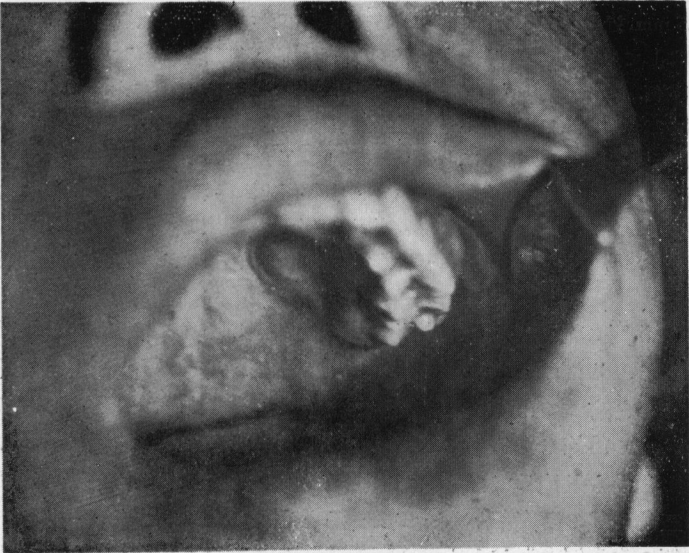


圖 1

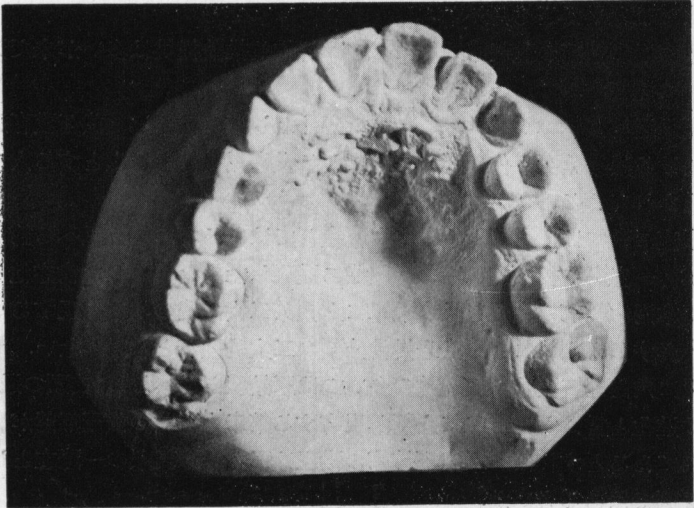


圖 2

心頰側咬頭の三角隆線上に發現し、近心舌側咬頭に關係なく、丘狀を呈し、其高さ2.5 mm、近遠心徑3.2 mmを有し、他結節に比して著しく低く、其の口蓋側は稍々平滑にして頰側咬頭の三角隆線に平行に傾斜す。周圍は溝によりて明に境せらる。

第3例。同上患者 7 (穂坂論文附圖第20圖)、上顎左側第二大臼齒、近心頰側咬頭の三角隆線上に發現し、舌側咬頭三角隆線上に跨らず、丘狀を呈し、高さ3 mm、近遠心徑3 mmを有し、他結節に比して極めて低い。

第4例。日本人男子、16歳。7 (穂坂論文附圖第21圖)、上顎左側第二大臼齒、近心邊緣隆線、近心頰側咬頭三角隆線及び舌側近心咬頭との間に發現し、其近遠心徑2.8 mm、高さ1.5 mm、概形丘狀を呈し、他咬頭に比して低く其境界は明瞭である。

以上5例に就て觀るに、本過剩結節を發現した齧牙は上顎の第二大臼齒である。3例は男子で、1例は女子である。男子の1例は左右同名齒に各1個を有つてゐる。本過剩結節は明瞭に他の結節と區別せられるし、獨立の結節である事はX寫眞により明かであり疑ひの餘地がない。

しかし最も近接してゐる結節は近心頰側咬頭である。即ち近心頰側咬頭の三角隆線の基部から起つてゐるとも言へるのである。

5例の内1例のみが全く近心頰側咬頭と關聯なく獨立し、近心舌側咬頭とも聯接してゐない。故に大部のものは近心頰側咬頭三角隆線の異常發育ではないかと思へる。

爾來過剩結節の發現原因等に就ては歸納的推論提供は多いが未だ決定の域に達せず。

隔世遺傳 (Atavismus) に依つて説明せんとする者と、齒牙發育過程に於ける異常分裂、何等かの刺戟による發育異常に歸せんとする人々に分かれてゐる。

本症に就ては近心頰側咬頭の異常發育ではあるまいかと思へる節もあるが、一患者に於て左右第二大臼齒に發現したのを觀るし、尙亦他の齧牙に本過剩結節の發現を見ず唯單に上顎第二大臼齒のみに出現することは、必ずしも刺戟による齒牙異常分裂の二次的融着とも思へない。

兎に角齒冠皺襞及び咬頭數の多いのは原始型と思へるし、咬頭の退化、或は進化と言ふかに因つて人類が現有する第二大臼齒の齒冠形態が完成されてゐるとすれば、本過剩結節の發現は祖先歸り現象の一證左としての好例ではあるまいか。

(受附：昭和17年2月28日)